

オピニオンに抗して ―

「ヴァン・ヴェルデ兄弟の絵画、または世界とズボン」におけることばの問題

藤原 曜

気まぐれに入った画廊で、あなたはほぼ無名といってよい画家の手によるいくつかの作品を目にする。その画布が、もしそれまでにあなたが見たことのなかった類のものであったら、あなたの最初の反応はいかなるものだろうか。なにか新しいものを発見できたという喜びだろうか。居心地の悪さだろうか。それとも嫌悪感だろうか。もしその画廊の片隅に、画家を紹介する冊子があり、あなたがそれを手に取るなら、それら新奇な作品を前にしたあなたの反応は、その紹介文を読むことで変わってしまうだろうか。その紹介が、適度に簡潔で、明晰なものであったなら、嫌悪の対象でしかなかったそれらの絵も、実は立派な作品であったとあなたは考え直すかもしれない。もしそれが不明瞭で、晦渋なものであったら、あなたは絵に対する拒否感をより強固にし、最初に抱いた嫌悪は正当なものであったと結論づけるかもしれない。いずれにせよ、ひとたび、あなたの目の前にある絵について書かれたことばを読んでしまえば、あなたはもはやその絵と直接的な関係を結ぶことはできなくなる。あなたと絵の間には他者のことばが入りこんでしまったのだから。

『カイエ・ダール』誌、20/21号(1946年)に掲載された小論「ヴァン・ヴェルデ兄弟の絵画、または世界とズボン」において、サミュエル・ベケットは、当時、パリでほとんど知られていなかったブラム・ヴァン・ヴェルデとジール・ヴァン・ヴェルデという二人の画家を紹介し、それぞれの作品の独創性について述べている。だが、同時に、前置きとして、絵画の愛好家に向けて世間の人々が語ることばのいくつかについて考察し、ヴァン・ヴェルデ兄弟の画業を論じたあとにも、当時、流通していた「人間的なもの」ということばが、絵画の愛好家のみならず芸術家その人にまで影響を及ぼしていることを指摘している。

本発表では、絵画をめぐる言説に内在する紋切型に対してベケットが強く警戒していたことを、愛好家と批評、「人が言うこと」と「人が言わないこと」、芸術とオピニオンという三つの対立軸に注目することで明らかにしたい。諧謔と皮肉に満ちたこの小論において、ベケットは自身のことばが権威的なものとなることを一貫して避けている。そしてこのような問題意識は、言うまでもなく時を待たず執筆されることになるベケット自身の小説や戯曲に引き継がれるものである。ヴァン・ヴェルデ兄弟の絵画について書かれた小論を、このようにことばの問題として読むなら、われわれはベケット自身の作品を理解するための新たな視座を獲得できるだろう。

(関西学院大学非常勤)